

2023年9月17日（聖霊降臨後第16主日、特定19、A年）

牧師メッセージ

「わたしがお前を憐れんでやったように」

（マタイによる福音書18：21-35）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音は「兄弟を得る」ことについて語られた先週の福音と繋がっています。テーマは「赦す」こと。「兄弟を赦す」ことは「兄弟を得ること」だと語られています。

ペトロは今日の福音の冒頭で主イエスに、「何回赦すべきか」と問うています。赦すべき回数を問うたペトロにとって、「赦し」とは自分の受けた損害を我慢することです。つまり、「何回赦せばよいですか」という問いは、「何回我慢すればいいですか」という問いだったのです。もしも「赦し」が「我慢」することならば、それはいつか限界を迎え、我慢できなくなって兄弟を失うことになってしまいます。このペトロの姿勢は、わたしたちの常識といったものの中ではよく見られることです。しかし今日の福音は、わたしたちにとっての本当の損害とは、地位や名誉やお金が失われることではなく、兄弟が失われることだと語ります。だからこそ主イエスは、七の七十倍赦すこと、つまり無制限に赦すようにと教えています。

主イエスが問題にしているのは回数ではなく、「赦さない心」です。「ここまでは赦してやる」という制限を設けているということは既に、赦すという心から離れ、「赦さない心」がその中心にあります。主イエスは「赦さない心」ではなく、「赦す心」こそ持たなければならないと言っています。わたしたちは兄弟を得るため、神の家族としての交わりを得るために「赦す心」を持たなければなりません。しかし、その「赦す心」をわたしたちが持ち続けることは、どうしても限界があります。それゆえ、神はわたしたちの赦しの源となってくださるのです。今日のたとえ話で、とんでもない額の負債を抱えた家来を赦した主君のように、神がまずわたしたちのことを赦してくださるからこそ、わたしたちのなかに「赦す心」がもたらされます。「心から赦す」ことができる者とは、「深く憐れんで赦す」神に出会った者のことです。

神がまずわたしたちを憐れみ、赦してくださっていることは、主イエスの十字架によってこそ示されました。ご自分の命をかけるほどに、わたしたちの命は尊いということ、主イエスは示してくださいました。御子の命を惜しまないほどに、神の憐れみは大きいのです。主がわたしたちをこれほどに赦し、憐れんでくださるからこそ、わたしたちはその神に倣い、互いに赦し合い、赦しと和解の関係を築くことができます。主君が家来に言った、「わたしがお前を憐れんでやったように、お前も仲間を憐れんでやるべきではなかったか」という言葉を忘れずにいたいと思います。わたしたちを深く憐れみ、赦す神は、神の家族として互いに赦し合う共同体へと、わたしたちを招いています。